

月刊
JMITU

テクノカ



7月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2023年発行

No.463

23年秋闘要求準備 賃上げの春闘、職場の諸要求は秋闘

私達JMITUセガ労働組合は年に2回会社へ要求を提出しています。春闘要求が賃上げメインであるならば、これから準備する秋闘要求は、職場の諸要求がメインの要求です。

職場の環境問題、待遇、規則や制度について、年末一時金についてなど要求していきます。当然、非正規の方についての賃上げ要求は、春闘だけでなく引き続き行っています。

今問題になっている某中古車販売会社の経営がワンマンで、調査委員会の報告書では「経営陣に盲従し、忖度するいびつな企業風土」と指摘さ

れ、経営計画書には、「能力があっても社長の思想を受け入れない人は今すぐ辞めてください」

「経営方針の執行責任を持つ幹部には、目標達成に必要な部下の生殺与奪権を与える」

「社員旅行や親睦会などの会社行事の不参加者は、人事評価を下げる」

この会社は、会社と社員のベクトルを合わせる目的で記載した内容と説明しているようです。

ハラスメントが問題になっているこのご時世でまだ行っているのは問題です。

どのような会社でも多かれ少なかれ経営陣への忖度はあ

ると思います。社内での上下関係にて、上司は部下よりも、上司の方を向いて仕事をし、その上の上司は更なる上を見て仕事をしています。

成果主義賃金の中では当たり前の事象です。人事評価するのは部下ではなく上司なのだから、当然そちらに向きます。

ベクトルを合わせてと言えば、従業員エンゲージメントを向上させようとセガサミーグループ各社も対応しています。高めるための有効な方法が、「会社が目指す方向性や場所を定める。」「社内でのコミュニケーションを活性化させる。」「従業員の不満や改善してほしい声を元に改善活動を行う。」とあります。

最後の従業員の不満や改善を要求するのが秋闘要求です。

従業員エンゲージメント向上には秋闘要求の実現が不可欠です。

セガオブアメリカ労組勝利

AGISCWA労働組合が今月11日組合選挙にて91対26で勝利しました。

200名以上のメンバーを擁する組合は、現在ゲーム業界全体で組織化された労働者の最大の複数部門をまたがる組合になりました。何ヶ月にもわたる会社の執拗な労働組合潰しの試みをたたかい抜き、交渉のテーブルに向かいます。セガオブアメリカの仲間が労働組合を結成したことに敬意を表し、私達労働組合もより良い労働環境になるよう頑張っていきたいと思えます。

掌編小説

欠けた街路樹

仙洞田一彦

塩貝は家の二階の部屋から、隣の新矢の家の前を見やりながら思った。

「言うに、言えない事情があるのかな」

塩貝の家の前の通りは桜並木になっていた。全長百メートルもないくらいだから、並木通りといってもささやかなものだ。

等間隔に畳半分くらいの地面の見えるところがあり、そこに桜が植えてある。塩貝の家の前にもある。隣の新矢の前にもある、というか、かつてあった。新矢の前は今、桜の切り株が残り、そこ以外の地面は雑草も生えないように

防草シートで覆ってある。

隣家のこととはいえ、何時も見張っているわけではないし、隣は隣と割り切って暮らしていた。

おそらく去年、桜の季節のことだ、あれ、隣の桜はどうしたんだろうと思った。でも、そんなに何年も気づかないでいたはずはないから、その季節の前に切られたのだろう。いくら公のものといっても自分の家の前の桜が切られたら、役所に文句の一つも言いたくなる。だが、隣の家の前の桜だ。何かうちの生活に影響があるわけでもないから、放っておいた。

桜の葉が枯れて散るところだから、秋から冬にかけての事だろう。時々うちの前に、落

ち葉がまとめられているようになった。量はせいぜい塵取りひとすくい分くらい。風がひと吹きすれば、また散らかつてしまう。

風もなく穏やかなたそがれ時、めずらしく散歩などして帰って来た時だ。家の前を箒で掃いている人が見えた。そこで足を止めて眺めた。年恰好、背格好から隣の奥さんらしい。奥さんが玄関に入ったのを見計らって、家に戻ると、うちの玄関前に落ち葉がまとめられて小さい山になっていた。

こんなんだったら塵取りで取って、自分の家に持って行ってくれたらいいだろう。人のうちの前に山にしておくなんて。

そう思って新矢の家の前を

見て、もしやと思った。新矢の家の前の桜は根っこだけしかない。ここに散らかつている枯葉は、塩貝さん、あなたの家の前の桜の木のものだ。だから、あなたの家で枯葉を片付けなさいということか。そういうメッセージが込められているのかもしれない。それで、これ見よがしにうちの前に。

口を出すほどの事でもないが、二、三日続けて枯葉の山が玄関前にあると、やはりそうか、自分の思った通りだと思ふようになった。念のため妻に聞いたが、妻が掃き集めたものではないようだ。

枯葉の山のことは妻も気づいていた。

「そう、そうよ」
私が思っていたことを言う

と、妻はそう答えた。続けて云った。

「前に新矢さんの奥さん、家の前の街路樹なんて、迷惑よね。そう言ってた」

「そうはいっても、玄関にくっついて立ってるわけじゃないから。ないよりあった方がいい」

「そうよ」

「それにしたって、枯葉をわざわざ集めて、うちの前に置くことはないだろうなあ」

「うちが、何もしないから、あてつけよ」

妻が言い放った。

「まめに落ち葉を片付けられるんだったら、自分の家の前の桜の木を切ることはないだろう」

「新矢さんが切ったんでしょうね、枯葉の片づけが嫌で」

妻との会話はそれきりだった。枯葉の山があれば、多少

腹が立ったが黙って片づけた。我が家はその分いい加減なのかもしれない。いい加減じゃない、度量が隣とは違うのだ。

落ち葉の山も、落ち葉の季節が終わるとなくなった。

もしかすると隣家の新矢は、我が家のその雑さが一番気に障るのかもしれない。ふと、そう思った。新矢という人は完璧主義者かもしれない。花びらも、枯葉も片づけない塩貝夫婦に腹を立てているのだ。だから当てつけをやる。

冬から桜咲く季節になった。塩貝の家の前が華やかになった。それに比べると、枯れ切った桜の根っこしかない新矢の家は、実に殺風景だ。やはり、季節、季節にふさわしい

草や木の姿があった方がいい。

ちようど桜が満開のころ、散歩に出ようと表に出たら、新矢の旦那が自分の家の玄関先に立って、うちの前の桜を見上げていた。その姿を見るか見ないかのうちに、私に気づいた旦那は、すぐに玄関を開けて引っ込んでしまった。

私は思わず笑った。そして「見物料を払えなんて言わないよ」と、独り言ちた。

玄関先にゴザを敷いて、新矢様ご夫妻を、お花見にご招待するか、などという意地悪な考えもよぎった。

それから桜散る季節になった。雑な感覚の私も、すぐに枯葉の季節を思い出した。今度は家の前に、枯葉ならぬ花びらの山かな、と。物事があり、まりにも思うとおりにになると、

笑いを通り越して気味が悪い。

花びらを散らす風が吹いた後、汗を伏せたくらいの小さな淡い桃色の山が、家の前にあつた。

それから時が過ぎ、暑さ沸騰という深刻な夏が来た。桜は緑色の葉に光を一杯浴びて風に揺れていた。新矢家前の桜は、季節は変わっても灰白色の根っこだけをさらしていた。

自動車修理・中古車販売会社の街路樹切断事件が起きた。並木がある。そのうちの一軒、その家の前だけ切り株しかないのを思い出し、空想し、書いた。やはり、ワケアリなのか、なあ。